持続への回帰
―ベルクソン「持続」概念の探究―

長谷川　暁人

「全ての事物を持続の相の下に(sub specie durationis)見る」(PM1365)、本論はベルクソン哲学の核心をこの一言に集約することを目指すものである。ベルクソン哲学において持続(durée)の概念が最重要なものであることは周知の通りである。しかし、なぜベルクソンにおいて持続が重視されなくてはならないのか。あるいは違う形で問題を設定することもできるだろう。なぜ持続に基づく哲学は「我々に歓喜(joie)を与えることができる」(PM1365)のか。この問いに対する答えは持続概念を探究した先にしか存在しない。そのため、我々はベルクソンの持続概念を様々な角度から捉え直す必要がある。

1 章においては、ベルクソン哲学の全体像を浮かび上がらせることを主な目的とする。ベルクソン哲学の大枠を明らかにすることで、後の問題についての方向性を与えることができるだろう。

1 節では、持続の定義を確かなものとするため、ベルクソン自身の言葉に沿いながらその変遷を追った。ベルクソン哲学は持続という概念に貫かれているが、しかし著作によってその強調点が違い、ある点においては矛盾と移るような場面も生じる。『意識の直接与件』においては意識が持続として定義され、それと対比するものとして空間(espace)が置かれた。この両者は厳密に区別され、本性の差異の下に置かれた。しかし『物質と記憶』ではこの持続の蓄積である記憶と、空間的な物質との和解の場が設けられる。それらは持続の収縮―弛緩として描かれるが、それはある種の持続一元論と見ることができる。そしてその方向性は『創造的進化』においても保持された。しかしベルクソンの持続に対する態度は一貫している。『意識の直接与件』において持続と空間に対応する内的自我と外的自我が提示された際も、あるいは『創造的進化』で持続が生命に宿る内的な力として描き出された際も、ベルクソンは常に持続への回帰を標榜しているのである。

2 節では、直観概念の方法化とその役割について考察した。直観は持続を感得するための方法として描かれるが、この解釈をどこまで推し進めることができるか。ドゥルーズは直観をいくつかの規則によって方法として定立するが、この諸規則のうちあるものは採用され、あるものは捨てられなければならない。というのも、描き出される直観のうちにはその過程の内で現れるいくつかの性格や能力と、また方法としての直観そのものとが混在しているからである。そのようにして残った方法としての直観は、持続と空間、あるいは質と量を分割し持続の側に立つことであった。またその延長上として、1 節との関連において弛緩としての外的事物に対する直観も規定される。

3 節では、哲学(philosophie)と科学(science)の関係性についての検討を行う。『意識の直接与件』以来哲学と対比的に置かれることが多い科学だが、ベルクソンは科学を全面的に

否定するわけではない。科学が批判されるのはその分析的な手法を持続にも適用しうると考える点においてである。ベルクソンは『思想と動くもの』では形而上学(métaphysique)と科学を対比させている。こうした観点は徹底されているわけではないが、ここでは形而上学の方法である直観と科学の方法である分析がそれぞれ持続と空間を認識するものとして対等な関係に置かれていた。しかし、ベルクソンは形而上学にも分析が、科学にも直観が必要であると考える。そして、その両者を統合するものとしての哲学という位置づけが現れてくるのである。ここでの哲学はもはや哲学とでも科学とでも呼ばれてよいものである。

結果として、1 章はベルクソン哲学の全体にわたっていかに持続概念が主要な位置を占めているかを改めて基礎づけることとなる。

2 章では主として『物質と記憶』に典拠を求めつつ、記憶としての持続への立ち返りというベルクソンの方向性を明確にした。

1 節においては『物質と記憶』特有のイマージュ概念によって、観念論と実在論がいかにして取り持たれるのかを確認した。イマージュは表象(représentation)と事物(chose)との中間にある存在として、この両者を結び付ける役目を果たしているのである。そしてベルクソンは純粋記憶と純粋知覚という権利上の概念を通じて、我々の実際の想起がいかになされるのかを述べる。そしてその先にある二種類の過去の残存を規定する。それは身体の運動機構(mécanismes moteur)における残存と独立的な記憶(souvenirs indépendants)における残存である。しかし前者は記憶の形を装った身体習慣であり、記憶の地位に値しないと退けられることになる。

2 節においてはベルクソンが行っている失語症の症例検討をまとめる。持続の蓄積である記憶がベルクソンにとって重要なものなのは疑いがない。一般に失語症は記憶が破壊されると見なされる病気だが、本当にそうなのだろうか。失語症は言葉を聴き取れなくなる、あるいは話せなくなるという症状を呈するが、それはベルクソンにおいては身体の運動機構の障碍、あるいは独立的な記憶の想起を阻害するものとして描かれた。しかしベルクソンにおいては、記憶の想起は潜在的な記憶のイマージュ化を意味するものであり、記憶そのものの破壊ではなかった。そのことが、失語症における語の記憶の失われる順序の法則を根拠として述べられる。独立的な記憶の存在そのものは常に担保されており、物質としての脳の障碍は記憶そのものを侵すことはないのである。

3 節では身体に備わる運動機構が作り上げる習慣の可能性を探る。習慣は身体において形成されるものであり、そうである限り持続の介在がなく、否定的な側面しか持ちえないように思われる。実際のところ習慣に堕した人間はベルクソンにおいては肯定されえない。しかし習慣の獲得は行動する人間の本質に根ざすものであり、習慣を一切身につけないことは不可能であった。またベルクソンは直観の習慣、という言葉を使う。この言葉は常に持続に立ち戻る注意の連続として捉えられなければならない。ゆえに、能動的に習慣を更新し続けていく態度をあるべき姿として描き出すことになる。

4 節ではプルーストの記憶論との比較を行った。プルーストはベルクソンの記憶論について言及しており、自身の小説を無意志的記憶(mémoire involontaire)と意志的記憶(mémoire volontaire)の区別によって透徹している作家である。プルーストは過去に戻り過去そのものを生き直すような無意志的記憶を重視し、現在において冷静に想起される意志的記憶は記憶の本質的な部分を失っていると考えた。そしてこの両者の区別がベルクソンにはない、と批判している。この指摘はある意味では正しい。しかし両者の間にはそもそも記憶に対する前提が異なっている。ベルクソンにとってはどのような形で記憶が想起されるかは重要な問題ではなく、注意によって記憶の方へ向き直る姿勢だけが必要とされているのである。そのため、プルースト的な夢想はベルクソンにおいては重視すべきものとはならなかった。

このように 2 章では記憶の概念を中心としながら、持続の蓄積である記憶がどのようにしてベルクソン哲学の内に位置づけられ、主要な役割を果たすのかを再確認した。

3 章においては言語の問題に的を絞り、持続概念と言語との相関関係を明らかにした。ベルクソンはその哲学の初めから言語に対する忌避感を露わにしている。だとすれば哲学者、叙述者としてのベルクソンのあり方はこれに反するものではないか。

1 節では言語が持続を空間化するものであるという定義を確認した後に、しかし思想は言語によってしか伝わることがないのだという事情を明らかにした。その上で、言語は知性によって作り上げられるものだということが分かる。我々は言語を使うがゆえに、様々な対象について思考することができるのである。ここに言語の持つ二つの側面がある。

2 節では、我々が言語を読み解く際のありうべき姿勢を明らかにする。ベルクソンは『思想と動くもの』の「哲学的直観」において、哲学者の思想を読み解く過程について語っている。そこではその記述の論理関係を追うのではなく、それらを取りまとめるより単純な媒介的イマージュ(image médiatrice)に遡ることが肝心であった。第二章で述べたように、イマージュは表象と事物の中間的存在であり、それゆえに空間的な言語よりも持続に近い位置にある。この媒介的イマージュを通して、我々は言語の奥にある哲学者の持続を読み取るのである。ここにはイマージュの向こう側にある持続に立ち返ろうとする努力が求められる。

3 節では我々はいかに思考を言語化すべきなのかについて検討した。媒介的イマージュは言語の奥にある持続へ近づいていくための有効な方法だが、読み手の努力を必要とするものであった。では書き手としての我々はどのように書くべきか。ベルクソンはここで比喩を重視する。言語の空間化における本質は、思考が明確な輪郭を持った言語によって固定されることであった。比喩はそれに対し、日常の用語法から外れているがために受け手において明確な輪郭を構成しない。だからこそ比喩は受け手に対し、書き手の持続を暗示するための方法として有効なものとなるのである。ただし、どのように比喩を使うか、という要素もここでは重要なものである。常套句や適切でない比喩は、そのような持続をうまく暗示できないのである。

4 節では、我々がどのように他者の持続に自分の持続を当てはめていくかを明らかにした。例えば詩人が詩を読むと、人はしばしば彼の読む詩に共感する。そこで何が起こっているのか。ベルクソンはここで持続のリズムについて語る。我々が他者の持続に共感するとき、そこには両者の思考のリズムの一致が存在するのである。そして、なぜベルクソンは詩人を評価しつつも哲学者であり続け、詩人とならなかったのか、という問いに答える。それは、哲学が直観に関わると同時に分析にも関わるものであるという定義から導き出せる。

このように第 3 章では言語の観点からこれまでの問題をまとめ直した。ここでもやはりベルクソンは言語の問題に絡めつつ、持続の方向へと向かうことを我々に求めるのである。

このようにベルクソン哲学の様々な問題を取り扱いながら、ベルクソンがその都度持続への回帰を促す姿を描き出してきた。結論において我々はその集めた線を一点に集約させる。持続とはどのようなものであったか。それは(1)我々の意識そのものであり(2)それ自身で保存される記憶であり(3)創造の力であり(4)常に新しいものであり(5)言語化されない気分であり(6)直観の努力によって捉えられるべきものであった。こうした持続の様々な性格は、我々がそこに立ち戻ろうとするたびごとに絶対に本源的なものとして自己の内に認識されるのである。実際、我々が持続へ回帰するとは、自分自身へと回帰することに他ならない。ベルクソンは『精神のエネルギー』「意識と生命」において次のように語っている。

> 快楽(plaisir)は、生命が生を保持するために自然によって想像されたごまかしに過ぎまない。快楽は生が進む方向を示さない。しかし歓喜(joie)は常に生が成功したこと、生が領地を得たこと、勝利を収めたことを告げている。（中略）喜びのあるところにはどこにも創造がある。（中略）あらゆる領域で生の凱旋が創造であるとすれば、人間の生活の存在理由は芸術家や学者の創造とは異なり、あらゆる瞬間に、全ての人において追及される創造の内にある。それは自らを自らが創造することであり、少しのものから多くを、無から何かを引き出す努力による人格の拡大であり、世界に豊かさを絶えず加えていくことである(ES833)。

科学的な知性によって拡大されていく世界においては、我々は快楽を得ることができる。そこにおいて社会と個人はより安心することができ、我々に便利さを約束してくれる。しかしそうした快楽はある意味では生命の創造の停止に他ならない。それは空間的な充実であり、我々の外的な自我しか満たすことはない。しかし、もし我々が自分の内部に立ち返り、自身の持続を感じながら自己の不断の創造を行うならば、そしてもし直観によってこの世界の内で流れているものに我々自身の持続を結びつけるなら、そこには歓喜があり、生命の前進が存在するのである。このような観点から、またこのような持続の効用によって、ベルクソンは常に持続への回帰を促しているのだと我々は結論付ける。